

令和6年度第1回宮崎県スポーツ推進審議会 議事録

I 日程等

- 1 日 時：令和6年7月11日（木）
- 2 会 場：県庁本館講堂
- 3 出席委員：春山 豪志 委員、高木 美里 委員、木下 理 委員、
金川 敏洋 委員、横山 幸子 委員、那須 雅博 委員、
谷口 行孝 委員、長尾 岳彦 委員、玉城 美千子 委員、
松元 春香 委員、竹元 明子 委員、米丸 麻貴生 委員、
山本 順之 委員、飯塚 実 委員、宮田 若奈 委員、
遠坂 有太郎 委員、三好 佳奈芽 委員 (17名)

II 概要

- 1 副教育長あいさつ
- 2 委員紹介
各委員より自己紹介
- 3 会長（議長）・副会長選出
会長：春山 豪志 委員、副会長：那須 雅博 委員

4 議事

(1) 説明

ア 令和6年度宮崎県スポーツ推進審議会計画について

イ 令和6年度スポーツ関係団体への補助金について

ア、イについて、事務局より説明

| 発言者 | 発言内容 |
|-----|--|
| 議長 | ○ 事務局の説明について、質問等がないか。 |
| 委員 | ○ 来年、本県で全国中学校体育大会が開催されるのに伴い、現在市町村を訪問して負担金等のお願いをしている。県民の大事な税金で成り立っていることは十分わかった上で、近年の物価の高騰や人件費の確保等、費用面での課題は多い。ぜひ、現在の中体連の現状を、県にも把握していただきたいと思い、意見だけ述べさせてもらう。 |
| 委員 | ○ 市町村の部活動指導員は、運動部活動だけでなく、文化部活動にも適応されているのか。 |
| 事務局 | ○ 文化部活動にも適応されている。現在、中学校では20名、高校で8名の部活動指導員が配置されている。 |

(2) 説明

ア 宮崎県スポーツ推進計画について

- ・ 施策10 『幅広い世代でのスポーツの推進』について
- ・ 施策11 『児童生徒の健やかな体を育む体力・健康づくりの推進』について

アについて、事務局より説明

| 発言者 | 発言内容 |
|-----|---|
| 議長 | ○ 事務局の説明について、質問等がないか。 |
| 委員 | ○ 県では、体力向上や自転車ヘルメット着用推進等、様々な分野でモデル校やリーダー校の指定を行っているが、指定された学校の追跡調査や、その報告等は行っているのか。 |
| 事務局 | ○ 体力向上について、学校を指定し推進を図ることは行っていない。体力テストの結果において、県内の学校全体の向上を目指し、支援を取り組んでいる。 ○ 様々な分野で指定されたモデル校やリーダー校の追跡調査は実施している。どのような取組をしたのか、報告書を提出いただき、検証を行っている。 検証結果については、市町村によって取り組みが難しい現状にあたり、学校間の競争意識等につながりかねなかったりするため、公表できない状況がある。しかし、検証結果を次の事業や、次年度へ活用する取組については実施している。 |

(3) 協議

ア 県スポーツ推進計画に基づく本県スポーツ推進の現状と課題について

| 発言者 | 発言内容 |
|-----|---|
| 議長 | ○ スポーツ推進計画を進めるに当たり、御意見、御助言をお願いしたい。意見のある方は挙手にてお願いしたい。 |
| 委員 | ○ 障がい者スポーツの実態を報告すると、今県内で約82,000人の方が障がい者手帳を持っている。5月に県障がい者スポーツ大会を実施しているが、コロナ前までは1,500名ほどの参加者数があったが、コロナの影響、また高齢化に伴い、本年は700名弱の参加であった。 これは県障スポ協会としても非常に大きな問題として捉えており、若手の障がい者の療養手帳、身体障害者手帳を持っている方への参加の呼びかけ等が必要になってくる。 県障スポ協会としては、県の障がい福祉課と連携し、共生スポーツ事業、パラスポーツステップアップ事業、また、団体競技のチーム力強化事業、個人競技の強化事業等を、3年後の全国障害者スポーツ大会を見据えて実施している。その中で一番の課題は、3年後の全国大会終了後、どのように障がい者スポーツを持続可能なものにしていくかということである。特別支援学校の卒業生が地域で生活する際に、総合型地域スポーツク |

| | |
|----|--|
| | <p>ラブや市町村の福祉団体といった関係機関が連携して支援していかなければならない。県障スポ協会としても今後更なる連携を図っていきたいと考えている。</p> |
| 委員 | <p>○ 総合型地域スポーツクラブは、誰もが身近に地域でスポーツを楽しむことを前提に環境づくりを行っている。</p> <p>現在、障がい者の方も対応できる総合型地域スポーツクラブは、26クラブ中4クラブだけであり、今後のさらなる拡大を目指している。今後は、障がい者向けの広報やPRにも力を入れていきたいと考えており、障がいのある方も参加できることを表すシンボルマークを作成し、それを多くの総合型地域スポーツクラブに浸透させていきたいと考えている。障がいのある方が「やってみようかな」というきっかけづくりをしていきたい。</p> <p>○ 総合型地域スポーツクラブ登録・認証制度について、県から市町村に対し説明いただいた。クラブと市町村で連携を図りながら、登録クラブの質的充実を促進していきたい。クラブが充実していけば、地域の環境づくりも活性化されると思う。</p> |
| 委員 | <p>○ 県社会福祉協議会では宮崎ねんりんピックを主催しており、高齢者が取り組むスポーツイベントの一つとして、今年は29種目、約3,000名の方が参加している。参加者は60歳以上で、最高齢が97歳であり、様々な競技で多くの高齢者が活躍している。ねんりんピックの競技は、高齢者対象の競技もあれば、若い世代も一緒になってできる競技もあり、同じ会場内で幅広い年代で実施できるのが魅力である。シニア世代が若い世代へつなぎ、生涯スポーツに結びつく、非常に意義深い大会である。また、上位入賞者は全国大会へ出場することができるため、競技力といった面でも、高齢者にとって大きな生きがいになっている。</p> |
| 委員 | <p>○ 競技スポーツの立場としては、いよいよ、2027年国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会が開催されるのに伴い、少年男女の種別となるターゲットエイジの選手が中学校から高校へと進学し、この世代をどう巻き込んでいくかというところが大きな課題となっている。</p> <p>部活動とクラブチームが連携しながら様々な競技団体が競技力向上に向けて取り組んでいる中で、少しずつターゲットエイジの子たちが国スポに対する認知を高めてきたように感じられる。私たち現場の職員も懸命にPRしている段階であり、県もさらに国スポ障スポに関する広報活動を広めていただき、様々な世代に認知していただけるよう手立てを講じていただきたい。</p> |

| | |
|-----------|--|
| <p>委員</p> | <p>○ 幼稚園・保育園という立場で、なかなか具体的なスポーツという取組についての話は難しいところもあるが、幼稚園、保育園の場合は体育の授業というような考え方ではなく、幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で、「領域」というものに分けて子どもたちの保育を行っている。</p> <p>領域とは、健康、人間関係、環境、言葉、表現という5つに分けられており、その中の健康という領域に関して、私たちが子どもたちにどんな教育をできるかというのを考え、日々の指導を行っている。</p> <p>近年、保育の方針として、「主体性の保育」という、色々なことを強制しない保育が推進されてきている。そのような中、県スポーツ推進計画の中にある「スポーツを生かした『未来のみやざき』づくり」という点で考えたときに、主体性の保育だけに偏ってしまえば、何か挑戦する前にあきらめたり、自分の感情を適切に表現できずに癩癩を起こす子に育ったりと、バランスの良い保育を心がけなくてはならない。そのためには、色々な遊びの中でうまくいくことやいかないことを経験する中で、そこから立て直して次に行ってみようという気持ちを育てるといふところを幼児教育の中で実践しているところである。</p> <p>○ 県スポーツ推進計画「運動部活動の適切な運営」の中にバランスの取れた生活とあるが、休養日の設定や、活動時間を減らすことをしても、その時間がゲームやだらしない生活になってしまえば意味が無い。自分で正しい生活リズムをつくり出す力を身に付けさせるには、幼児期に、そして家庭の中で習慣として身に付ける環境づくりが重要であり、それを指導していくことも幼児保育に関わる人間の責任であると考えている。</p> |
| <p>委員</p> | <p>○ 障がい者スポーツトレーナーという立場で10年前から県障がい者スポーツ協会と連携を図りながら障がい者スポーツの推進に努めてきた。先ほど委員の意見にあったように、現在懸念している課題としては、3年後の全国障がい者スポーツ大会が終了後に、障がいのある方のスポーツ実施率が低下したり、選手が減少したりしていくことであり、大きな不安感をもっている。今でいうと、3年後の全国障スポ大会のために選手を増やす、または団体をつくっているというのが現状である。</p> <p>しかし、私たち理学療法士や医療職種の方は、本来の目的として人を支えることを仕事としている。そのため、大会に出るために選手を増やすのではなく、自分の身体を健康に保つためにスポーツを推奨し、そのサポートや怪我の防止というのが私たちの責務になる。現在は、全国障スポをきっかけにスポーツをする機会が増えたり、補助金等をいただきながら障がい者スポーツの推進を図れているが、これが大会終了後も、同様の活動機会の確保や選手の育成が行える様にしていくことが大事だと考えている。</p> |

| | |
|----|---|
| 委員 | <p>○ スポーツ指導センターやスポーツ振興課が実施している指導者研修会等の効果が、学校現場にも浸透しており、全国体力運動能力運動習慣調査等、本県が良い結果を維持できていること、また「運動・スポーツが好き」と回答する生徒が全国平均より多いことは、学校体育の充実を表している証拠だと考える。</p> <p>○ 部活動の地域移行については、宮崎県の実態等を考えるとハードルが高い面も多いが、地域連携について各市町村でしっかり取り組んでおり、特に拠点校部活動の実施や部活動指導員の配置等、地域移行に向けた段階的な動きがここ数年で大きく進んでいる。</p> <p>○ ワールドアスリート発掘・育成プロジェクトでは、多くの修了生の活躍が見られているが、課題としては、高校進学時の県外流失を防ぐことであり、宮崎県内の高校に進学し、さらに競技力の向上が図れる環境を確保していくことが大切だと考えていた。しかし、実際には、ここ9年間の県内高校への進学は予想以上に高く、事業の効果がしっかり選手や家庭にも伝わっており、競技力向上のみならず、知的能力開発プログラムや講話等の様々な学びが、成果につながってきていると感じた。</p> |
| 委員 | <p>○ 小学校体育の現状と課題を考えると、例えば水泳の授業では、水に顔をつけられない、シャワーすら浴びられないという児童が非常に多いように感じる。特にここ数年は、コロナの影響もあり、水泳授業ができなかった学校も多く、低学年や中学年でやるはずだった水遊びや浮く・潜るといった段階的な指導を受けないまま、高学年の泳ぐという領域を学習するため、指導においても苦慮している現状がある。このように、体力についても同様の状況があり、体力テストの結果を見ても、今後向上していくためには努力を要する部分が多くある。</p> <p>○ 近年の異常な暑さにより、水泳授業であれば、水温が30度、プールサイドは40度という日もあり、実施困難な日もある。体育館や運動場では運動禁止するほどの危険な状態であり、代わりとなる運動機会を確保しようとしても、できないという状況がある。今後は、この環境に対応していくためにも、屋根付きプールや、体育館の空調設備の充実等、対策が必要になってくるのではないかと考える。</p> <p>ICTの活用や、学校体育研究発表大会での授業研修等で、授業の充実は図れてきたものの、やはり活動機会を確保していくためには、環境の整備は必要だと思う。</p> |
| 委員 | <p>○ スポーツに親しむと考えたとき、競技者だけでなく、応援に行く人や、サポートする人など、多くの人が盛り上がる機会が増えていくと良いのではないかと考える。特に、国スポ・障スポが開催されるということもあり、今後は競技者だけでなくその他に関わる人が多くいらっしやると思うので、その方たちがどうやっ</p> |

| | |
|-----------|--|
| | <p>たら楽しんでもらえるか、関わりたい、観戦したいと感じるかが大切だと思う。そのために、例えば、試合会場をコースにSALKOと連携したイベントを実施したり、国スポ・障スポグッズのプレゼント企画やSNSへの投稿を行ったりするなど、楽しく関われる手立てを考えていただきたい。</p> |
| <p>委員</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ インストラクターの事業として、イオンモール内をウォーキングする企画を行っており、多くの高齢者が参加され、健康スポーツ・生涯スポーツという意識が高まってきているように感じる。外では暑さもあり、実施が難しい中で、こういった大型商業施設等と連携を図りながら、安全に配慮した環境の中で実施できることは魅力的であり、多くの参加者が期待できると思う。さらに、多くの商業施設や企業とコラボしてスポーツ機会を提供できると、スポーツ実施率の向上に加え、企業の宣伝にもなり、大きな効果を生むのではないか。ぜひこのような事業を増やしていきたい。 ○ 現在、指導をするスポーツクラブの生徒で、数名の県外高校進学者がいた。その理由としては、施設等の練習環境の充実が多く挙がっていた。国スポ・障スポを迎えるにあたり、施設の整備はとても重要だと感じた。また、競技の面だけでなく、スポーツ施設のトイレ環境など、地域の人が身近に利用しやすい環境整備も大切になってくると思う。熱中症対策といった面では、施設の整備となると期間と予算を要するので、高校総体や中学総体のナイター開催等の工夫も検討していく必要があると思う。 ○ 国スポ・障スポの開催にあたり、さらにスポーツに親しむ人を増やしたり、関心をもってもらうためには、更なる広告活動が必要だと思う。例えば、様々な競技の出場選手のグッズ販売やのぼり旗の作成、そこに出身高校などを載せたり、プロスポーツが行っているような広告活動をする、さらに地元の人や学校関係者等が興味をもち、大会が盛り上がると思う。 |
| <p>委員</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ クラブ指導、また学校関係者として感じる課題は、運動の土台となる基礎体力が低いことで、怪我や事故につながってしまうということである。現在、自身の体の状態を知らない子供たちが増えてきており、自分にはどんな動きができて、どんなことをしてしまうと怪我をしてしまうという理解がなかなかできていない。体をつかった遊びを通して学んできたことが、現代の流れの中で、外遊びをしない子どもが増えてきており、いざクラブに入会し、競技を学ぼうと思っても基礎的な体づくりができていないので、なかなか競技の専門的な指導まで至らないことがある。クラブのみならず、学校現場でも、そのような悩みを抱えている先生が多くいるので、サポートや支援があるとすごくありがたい。また、「体が硬い」や「動きの癖」といった面で、医療関係とも連携を図りながら専門的なアドバイス等が |

| | |
|----|---|
| | <p>できていけば、競技力向上という視点でもさらに充実していくのではと考える。</p> <p>○ 今後、さらに県全体の競技力向上を図るためにも、小学校から高校生、さらには大学・社会人といった一貫性をもった指導の充実と活動環境の整備が必要なのではないか。近年では、活動環境の充実をもとめ、通信制の学校に通いながら、競技を続けている人もいる。長く競技に取り組んでもらうためにも、様々な視点で工夫していくことが今後必要になってくるのではないか。</p> |
| 委員 | <p>○ Jリーグの開幕により、サッカーの人気に弾みがついた時代、キャンプの誘致やスポーツ合宿を通したまちづくりという視点から、県の旅館組合の中で「スポーツランドみやぎ」という言葉が聞かれるようになった。県でも、最初は担当事務分掌だったものが、現在はスポーツランド推進課となり、スポーツが宮崎県にとって重要な位置づけであることがわかる。</p> <p>観光協会としては「全県下、通年化、多種目化」というワードを基に、今後のさらなる発展を目指している。宮崎市を中心としつつも、様々な市町村やスポーツ施設で、合宿等を実施していくこと。キャンプ時期のみならず、通年にわたって盛り上げていくこと。野球、サッカー、陸上といった野外競技だけでなく、屋内施設や屋内企画にも力を入れていくことを目指し現在取り組んでいる。</p> <p>また、消費者の方が「スポーツを見る」から「スポーツをする」につなげていこうと、特にゴルフにおいては、大会の観戦から、実際にプレーをしていただく環境の充実ということで、令和5年にはアジアで最も優れたゴルフ環境として賞を受賞するまでになった。今後はサーフィンやサイクリングといった競技において、海外の消費者をさらに増やしていくことに取り組んでいる。</p> <p>○ 県の3大プロジェクトのうち、スポーツ観光プロジェクトについて、現在、観光協会内にスポーツ観光総合窓口を設置し、7月1日から1,000人体制で対応している。また国スポ・障スポに向けて、新設された競技場や体育館、プールの持続可能な活用方法について、市と連携を図りながら協議を進めている段階である。その上、それを束ねるスポーツキャンプ大会誘致委員会が設立され、観光経済交流局長、国スポ・障スポ局長の次長、スポーツランド推進課長、スポーツ振興課長とスポーツ協会専務理事、観光協会常務理事とでタッグを組み、国スポ・障スポ大会の今後の有効活用について、協議を重ねている。</p> |
| 委員 | <p>○ 大学教員という立場でスポーツ社会学の視点から意見を言うと、「スポーツとはそれ自体が目的であり、手段ではない」というのが我々が一般的に考えるスポーツの定義である。これから、さらにスポーツを推進する上で、誰もが身近な地域でスポ</p> |

ーツを楽しむ組織の形成ということでは、2027 国スポ・障スポのために施設が整備されたり、宮崎県内のスポーツの機運が高まり、多くの県民がスポーツに関わる機会が増えることは、非常に効果的であり、スポーツの本質的な目的だと考えている。そういった中で、県スポーツ推進計画の施策は、すべてにおいて連携してやるべき内容が書かれていると思う。

○ 現在、中学校部活動の地域コーディネーター、部活動地域移行コーディネーターをしているが、健常者における中学校部活動の地域移行のことばかりが表に出てきている状態である。実際は障がい者、いわゆる支援学校に通っている生徒さんたちや教員の課題を解決していくことも今後必要になってくる。ただし、県の管轄、市町村の管轄とで対応も違ってくるため、県として方針を出していくことが必要ではないか。共生社会という視点では、健常者、障がい者関係なく、同じ中学年代の子どもたちがスポーツに携わる機会を創出していかなければならないと考えている。

○ スポーツによる地域活性化という点では、宮崎県はスポーツに適した環境や施設が充実している。実際に今、延岡市では新県体育館が建設されているが、その体育館にどのような機能が必要か、自身の立場でヒアリングを受けた。その際に、話のポイントとなったのは「市民に使っていただける体育館じゃないと意味がない」ということである。スポーツランドみやざきとして、様々なプロチームがキャンプに来られ、経済的な活性化が行われている中、そこに居住する市民県民のための活用について課題が残る現状がある。例えば、プロチーム利用のために、芝の管理によって市民県民が利用できない等、せっかくの施設が一般の方に利用されないのはとてももったいない。居住している人たちが、スポーツを自らが行うための場所として、競技力向上や選手の育成、普及のみならず、様々なかたちで活用できる施設にしていかなければならない。

○ 現在、国スポ・障スポ大会に向けて、選手の育成、指導の充実を図り、様々な手立てをとっているが、大会終了後に、この選手や指導者をどう活用していくかが重要である。中には、県外等から選手や指導者を招聘しているケースもあり、この人材を今後も宮崎県に残していくためにも、学校関係者として体育専科としての雇用や中学校部活動指導者への展開、企業と連携しながら雇用・競技環境の確保など、宮崎県のスポーツ振興に関わる人材育成も大切になってくると思う。実際に、大学で関わった生徒の中に、ワールドアスリート発掘・育成プロジェクトの一期生がおり、このような事業が宮崎のさらなるスポーツの振興に大きく効果をもたらすと考えている。この取組を、学校体育にも活用されていくと、長い期間でスポーツの振興を図れると期待できる。宮崎県ならではの素晴らしい環境と施設設

| | |
|-----------|--|
| | <p>備があるので、うまく活用していき、益々宮崎のスポーツが発展することを期待している。</p> |
| <p>委員</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 現在、町村教育長会の代表という立場で、教育現場の課題と向き合っているが、特に町村は人口減少に伴い、部員の確保や部活動の存続という課題が大きく、部活動地域移行について協議を続けている状態である。しかし、全ての部活動を受け入れるクラブ等は、数も圧倒的に足りず、まだ実際のところはなかなか進んでいないのが現状である。多くの競技を選択する機会を確保していきたいとは考えているが、指導者の確保も難しく、今後は「〇〇町であれば競技は〇〇」というように、町村ごとに競技を絞っていくことも検討しなければならない。 ○ 各学校では部活動指導員の配置が進んでおり、県内では今年度250名程度いるということで、地域移行のための段階的な方法として、活用できている。しかし、部活動指導員の依頼についての課題もあり、これまで外部指導者として関わっていた立場から、部活動指導員になることで、引率責任を伴ったり、報酬を受けることに抵抗を感じたりと、実際にそれを理由に部活動から離れいく指導者もいた。これまで中学校が担っていた部活動の指導や責任を、部活動指導員に担わせるということは、負担も大きく、仕事をしながらの兼業というには、ハードルが高いようである。しかし、今後地域移行を進めていかなければならない立場として、町村と連携を図りながら、人材の確保のための手立てや行政が担う部活動指導員の給与補償等を考えていかなければならない。 ○ 現在、県では宮崎県中学校競技力向上拠点校を指定し、秋季大会上位校の強化に取り組んでいる。国スポに向けて、こういった取組と強化事業をうまく活用しながら、中・高・一般とつながりをもって取り組んでいくことが大事だと考える。昨年度の鹿児島国体でも、本県出身の選手が鹿児島県代表として結果を残しているケースが多々ある。ぜひ、県内で強化した選手が、今後も市町村で活躍できるような流れを構築していきたいと考えている。 |
| <p>委員</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 今年度のみやざき県民総合スポーツ祭の開会式に参加した際、県民の方の意識が「見るスポーツ」から「するスポーツ」に変わっていったと感じた。様々な年齢層の方が、こんなにもたくさん競技に取り組んでいる姿を目にし、その日は私自身もスポーツをやりたいと感じ、実際に取り組んだ。このように、何かのきっかけでスポーツに親しみ、また小さい頃の体験から、またやってみたいと、スポーツに再チャレンジすることはとても大切だと思う。 <p>特に、幼少期からスポーツに取り組むことで、やり遂げた達</p> |

| | |
|----|--|
| | <p>成感や、喜びや悔しさといった感覚が、大きな経験となり、将来にわたってスポーツに親しむ大きなきっかけづくりになると感じている。</p> <p>○ 栄養士という立場は、スポーツや健康という面で様々な関わりをもっている。学校関係でも、家庭科の授業を通じた指導や、家庭への健康指導の啓発などを行っている。また、保健指導という面でも、肥満の問題等を解決するために養護教諭と連携を図りながら活躍する栄養士もいる。</p> <p>このように、同じ栄養士という仕事の中でも、様々な分野で、専門的に活躍する人がいて、それぞれの分野から啓発活動等をできるよう連携を図っていきたいと感じている。</p> <p>○ スポーツを行う上で、毎日の身体計測など、自分の体を知ることが大切であると考えている。過度なトレーニングを行った場合に、自分の体の変化を実感し、食事について考えたり休養を摂るなど、栄養士の目線からアスリートをサポートし、スポーツの推進に貢献できるよう、さらに取り組んでいきたい。</p> |
| 委員 | <p>○ 高体連の立場として、様々なスポーツに関する事業に対し、県から補助をいただけていることにまずは感謝したい。生徒数の減少や物価高騰に伴い、大会運営等も厳しい状況が続いている。現在、高体連では3つの主催大会を開催しているが、今後の大会の在り方や開催方法の工夫等についても考えていかななくてはならない。</p> <p>○ 前回の宮崎開催の国体では、現役選手兼教員として、子どもたちの身近なところにトップレベルの選手がいた。競技力の向上はもちろん、その姿に憧れ、教え子が教員を目指し、指導者となって新たな世代を育てていくという姿があった。競技を通してつながりが続いていき、次の世代に受け継がれていくと考えたときに、今回の国スポについても、選手の確保はもちろんのことだが、指導者の確保、そして指導者の育成についての同時進行で取り組むべきことだと考えている。今回の国スポで選手として活躍した子たちが、今後宮崎のために指導者として活躍し、次の世代を担ってくれることを期待したい。</p> <p>○ 高等学校で、部活動が担う教育効果は大きく、時には部活動の活躍や結果が、その学校の大きな広告となり、生徒募集や倍率等にも関わってくる場合がある。特に私立高等学校においては、生徒募集が学校運営にも関わってくるため、部活動に求めるものも大きくなりがちである。しかし、現代の流れをみると、中学校で部活動をやっていたから、高校でも部活動を続けるとは限らない。特に、クラブチーム等で活躍した子に関しては、クラブの下部組織や、県外へ進学したり、また、通信制に通いながら、部活動ではなく自ら競技環境を探して取り組んでいるという現状もある。</p> <p>現在、県立高等学校の部活動で、結果を残しているケースを</p> |

| | |
|----|--|
| | <p>見ると、学校側の選手への配慮や県や市町村と連携を図ったサポートが必要だと感じている。例で言うと、全国、世界レベルの大会や遠征時の補助や公欠の取扱、市営住宅等を活用した寮の整備、食事面をサポートするスタッフの配置等、様々な視点でスポーツ環境をサポートしていくことが、競技力の向上につながり、高等学校の部活動が活性化されていくと考える。</p> |
| 委員 | <p>○ 現在運営している総合型地域スポーツクラブでは、県からの委託を受けて「共生社会の実現に向けた地域スポーツ推進事業」に取り組んだ。特別支援学校に通っている生徒を対象と一緒にスポーツをし、障がいのある子たちが、健常者と一緒にスポーツに取り組み、とても楽しそうな姿が見られた。「次はいつやるんですか」という声も多く聞かれ、今後もこの事業は継続してやっていきたいと考えている。この委託事業については、県からの案内がなければ知らなかったことであり、実施もできていなかったと思う。さらにこのような事業を、もっと多くのクラブに広めていくためにも、広告の重要性を感じた。</p> <p>○ 障がい者スポーツの競技力向上という面で、全国障害者スポーツ大会に向けて、合同練習会の実施や強化遠征等を実施するようになった。しかし、これまで県外に遠征に行くという概念がほとんどなく、費用面についても遠征費の徴収が難しい現状にある。障がい者スポーツの競技力向上に向けた、遠征費の補助等をしていただけると、さらに活動しやすい環境が整ってくると感じている。</p> |
| 委員 | <p>○ 競技力を高めていくために、指導者の育成や指導法の構築はとても重要ではあるが、それと同時に、選手側の指導を受け入れる姿勢づくりも重要になってくる。いくら指導者の資質を上げても、選手の理解度や、指導を受け入れる姿勢ができていなければ、競技力の向上にはつながらないので、メンタルトレーニングによって一方通行にならない関係性を築いていくことが大切だと考える。</p> |
| 委員 | <p>○ 少年団に携わって感じることは、やはり幼少期から勝利主義にこだわってしまっはいけないということ。現在のトップレベルの選手が、幼少期からトップにいたかと言われると、それに限らないし、中学校、高校、一般で大きな成長が見える選手はたくさんいる。小学校でチャンピオンシップを狙うのではなく、競技を楽しいて感じてもらい、すくすくと競技に取り組める環境をつくってあげることが指導者の責任である。</p> |
| 議長 | <p>貴重な御意見、ありがとうございました。</p> |